

茗荷村見聞記

―血縁、地縁のコミュニティ

近江学の視点から―

成安造形大学教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員・副所長

加藤
賢治

茗荷村見聞記
—血縁、地縁のコミュニティ 近江学の視点から—

成安造形大学教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員・副所長 加藤 賢治

Name:

KATOH Kenji

Title:

Observations of Myoga Village: A Community of Blood and Geographical Ties
—From the Perspective of Omi Studies—

Summary:

Ohagi Myoga Village in Higashiomi City, Shiga Prefecture celebrated its 40th anniversary. It is an ideal place where people with disabilities and able-bodied people coexist. Currently, the Omi Multicultural Institute is focusing on communities based on geographical and blood ties, and for the past three years we have been observing various communities over time. As an introduction, I looked at Ohagi Myoga Village and at the nature of local communities that will exist in future society from the perspective of Omi Studies.

はじめに

二〇二二年、近江学研究所の共同研究者として、連携している琵琶湖環境科学研究所センターの統括研究員であるキム・ゼギユ先生から、大津茗荷村（大津市伊香立）について、電話がかかってきた。大津を拠点とする大津茗荷村は、障害を持つ人や健常者がともに暮らし、働く場を創出して、六次産業を展開するソーシャルファームであり、成安造形大学の教員や学生たちとともに活動できないかという漠然とした内容であった。

元々、茗荷村とは、今から四十年前に、東近江市の大萩（おほはぎ）という集落に誕生した共同体組織で、開村当時から琵琶湖環境科学研究所センター元センター長の内藤正明先生が興味を示され、長年にわたって後方から支援されてきたという。

まずは、相談者である大津茗荷村を主宰する藪田喜山氏と会って話を伺うことにした。

藪田氏からはじめに伺ったのは、なぜ「茗荷村」と名付けられたのかという話であった。この話は、非常に興味深いものであり、後述するが、筆者が宗教民俗研究者として、茗荷村の活動に触れてみたいと思う強い動機となった。

また、障害児教育の先駆者の一人と言われる田村

一二氏の思想によって近江に開村されたということにも興味を持った。

現在、近江学研究所では「惣」「座」「講」研究プロジェクトとして三ヶ年の研究プロジェクトを進めている。内容は、禍を経て地縁・血縁や生業、趣味嗜好などのコミュニティを再検証しようとしている。この茗荷村の活動は、まさに地縁血縁のコミュニティが元になっており、そこに様々な生業を持つ人々が集まってくる。そして、なんといってもみんなが楽しいコミュニティでもある。

数日にわたって取材した茗荷村の見聞記を報告すると同時に、未来のコミュニティの姿を映し出す試みとしたい。

第一章 茗荷村の概観

(一) 大萩茗荷村を訪ねて

二〇二三年八月、大津茗荷村の藪田喜山氏の案内で、その村の原点である大萩茗荷村を訪ねた。藪田氏の拠点は大津市の北部、伊香立にあり、そこから車で琵琶湖大橋を渡って東近江市に向かった。約一時間半、名神高速の八日市ICを降りて湖東三山の一つとして知られる百済寺の近く、東近江市上山町にある就労継続支援事業B型施設である社会福祉法

人美輪湖の家「工房和楽」に到着した。そこで、現在、大萩茗荷村代表である小泉一郎氏と合流し、ともに茗荷村に向かった。

大萩茗荷村は、昭和五十七年（一九八二）七月八日に、当時の愛東町大萩、現在の東近江市百済寺甲町で誕生した。茗荷村の構想は、教育者で思想家でもある田村一二氏による。田村氏は、太平洋戦争終戦後の昭和二十一年（一九四六）に、糸賀一雄、池田太郎とともに養護兼知的障害児施設「近江学園」の創設に中心的な役割を持って関わり、その後、知的障害者更生施設の創設や、知的障害者教育を推進する組織である茗荷会を昭和五十四年（一九七九）に設立してその代表となり、その後、障害を持つ人と健常者がともに暮らす村として、大萩茗荷村を開村した。

「工房和楽」から車で山道に入り、約二十分林道を進むと大萩茗荷村に着いた。

入り口には、陶版が組み合わされ「大萩茗荷村」と表示された可愛らしいモニュメントがあり、そこに車を停めて徒歩で村に入った。中央に小さな広場があり、周辺に木造の建物が十棟ほどである



写真1 入り口にある「大萩茗荷村」と表示されたモニュメント

うか付んでいる。全体的には森林の窪地のようなどころになるのだろうか、大萩茗荷村は自然の中に溶け込んでいるように感じた。

その場所は、かつて大萩村という集落が存在したが、厳しい自然環境の中、自然災害をきっかけに集落ごと麓に移住した。田村氏は、わざわざその跡地を選んだというのである。

開村当時は、電気、ガス、水道は無く、車で麓まで二十分、麓からJR能登川駅まで三十分。もちろん近くに病院や学校、市場も無い。

田村氏は茗荷村という理想郷をつくりたいと思い立ったとき、日本全国の福祉施設を見て歩きながら、候補地を探したが、最終的にこの地を選んだ。もちろん駅に近く、ライフラインが整った好条件の土地もあったそうだが、最も自然環境が厳しい場所を選んだというのである。田村氏は、障害がある、無にかかわらず、ともに協力して村を運営するには、過酷な自然環境にある方が良く考えた。ライフラインが整い、何もかも便利な暮らしの中に、苦労は無く、苦労が無ければ、協力したり、感謝の気持ちが生まれないうと考えたのだという。



写真2 大萩茗荷村の様子 小さな広場に建物が散在する



写真4 田村氏が生活していた「茗荷村研究所」



写真3 広場横の建物 数名の村民が生活している

「ご案内いただいた小泉氏は、開村から五年目に入村されたことで、開村当時の苦労は知らないということであるが、「田村先生とこの地で語らった記憶は鮮明に覚えている」と懐かしみながら、当時、田村氏が拠点としていたという建物（現在は茗荷村研究所という名称で呼ばれている）の中を案内していただいた。

田村氏は、かつて洋画家の須田国太郎に師事したこともあり、襖には自身による独特な味わいがあるカップパやキツネ、地藏菩薩などが描かれ、民俗的な世界が表現されていた。

当時、和やかに語らったという囲炉裏や、家族の写真なども飾られており、亡くなられるまでここに出入されておられたという雰囲気十分に伝わってくる。

他に、食堂と言われる施設も案内いただき、現在も村の住民がここに朝、昼、晩に集まり、十数人が協力しあって暮らしていると伺った。食堂の世話をする女性と、村に暮らす住民の男性に出会ったが、お二人とも始終笑顔が絶えなかった。

大萩茗荷村を後にして、麓の百済寺の近く、



写真5 田村氏が描いたという襖の絵



写真7 食堂の厨房



写真6 みんなが集まる食堂内部

「くだら山荘」と呼ばれる茗荷村の交流施設にご案内いただき、そこで、茗荷村前代表で、田村一二氏とともに開村当初から村の運営に深く関わり、田村氏の思想、精神を受け継ぎ、支えてこられた高城一哉氏と出会った。

この日は、「くだら山荘」にて、ゆつくりと話を伺うことができた。

（二）大萩茗荷村の現在

田村氏の思想をもとにした茗荷村の開村と同時に、高城氏が家族とともに入村されたという。そこから現在まで四十年という歳月を経て、現在は、二〇〇名を超える村人が県内各地に散在するという。ここではその組織について伺ったことを記してみた。

大きな括りとして、大萩茗荷村という村が存在し、本拠地は先述した東近江市百済寺甲町（大萩村）にある。そこには、宗教法人として宗派を問わない「茗荷山天保寺」という寺院があり、住職が常駐し、仏式、神式の行事が一年を通して行われている。

そして、別に「NPO 茗荷村」というNPO法人が存在し、そこでは国内外の社会的弱者に対する支援活動を中心に、研修事業、福祉事業、保育事業、国際協力事業等の非営利活動が展開されている。また、情報紙の発刊を通して、茗荷村全体の広報活動も行っている。

その他、下記の施設が存在し、大萩茗荷村全体を構成している。

○NPO三艸苑家族(東近江市青山町)

- ・ファミリーホーム やまゆり(定員六名)
- ・ファミリーホーム 三艸苑(定員六名)
- ・グループホーム なんじやもんじやの木(定員五名)
- ・グループホーム なんじやもんじやの木 みやこ(定員五名)
- ・グループホーム なんじやもんじやの木 あおやま(定員三名)

○NPO法人わらべ村(東近江市青山町)

- ・サテライト住居 千鳥庵
- ・グループホーム 花のうてな(定員四名)
- ・グループホーム あしかび(定員四名)
- ・サテライト住居 がじゅまるの家
- ・天空(就労継続支援B型十名・生活介護十名)
- NPO法人わらべ村(東近江市青山町)
- ・グループホーム 愛育苑・愛育苑(定員六名)
- ・グループホーム 愛育苑・直心庵(定員五名)
- ・グループホーム 愛育苑・大楽(定員五名)
- ・グループホーム 自然寮・自然寮(定員六名)
- ・グループホーム 自然寮・かたつむりの家(定員一名)
- ・サテライト住居 アトリエ

○ファミリーホーム 石南花の家(個人運営)(蒲生郡日野町 定員六名)

○ファミリーホーム すずらん(個人運営)(愛知郡愛荘町 定員六名)

○社会福祉法人 美輪湖の家(東近江市百済寺町本

町)

- ・工房和楽(就労継続支援B型二十名)
- ・大楽(就労継続支援B型二十名)
- ・きりり庵(生活介護二十名)(特定相談支援・自立生活支援事業「はんどくさん」地域生活サポート 日中一時支援)
- ・みようが(生活介護十四名・生活訓練六名)
- ・おおきな木(生活介護二十名)
- ・暮らしを考える会(就労継続支援B型二十名 日中一時支援)
- ・フルミナ(生活介護十三名)
- ・グループホーム そのの家(定員五名)
- ・グループホーム 野の花(定員五名)
- ・グループホーム 松平の家(定員五名)
- ・グループホーム 清和の家(定員五名)
- ・グループホーム 陽気寮(定員四名)
- ・グループホーム すずらんの家(定員四名)
- ・グループホーム 大樹(定員六名)
- ・高齢者グループホーム 檀那木(定員九名)
- 社会福祉法人 美輪湖の家大津(大津市中庄)
- ・瑞穂(就労継続支援B型二十六名・就労移行支援六名 日中一時支援「パレット」「相談支援事業所ひなた」 居宅・行動支援・移動支援「きりん」)
- ・茗荷塾ワークショップ さかもと(就労継続支援B型二十名・自立訓練十名)
- ・美輪湖マノナファーム(就労継続支援B型二十名・就労定着支援十名)

・和邇の里(生活介護二十名)

- ・愛育苑(生活介護二十名)
- ・資生園株式会社(就労継続支援A型)
- ・グループホーム 大空(定員五名)
- ・グループホーム 大地(定員四名)
- ・グループホーム 瑞穂(定員四名)
- ・小規模多機能型居住介護事業所 真野の家歩(共生型生活介護 共生型短期入所)

○その他 関係団体

- ・大津茗荷村(滋賀県大津市中庄)
 - ・野洲茗荷村 陽だまり(滋賀県野洲市辻町)
 - ・東北茗荷村(宮城県石巻市山下町)
 - ・ファミリーホームみんなの家(宮城県東松島市大塩字緑ヶ丘)
 - ・NPOイワン農場(滋賀県東近江市百済寺甲町)
 - ・NPO愛の会(滋賀県愛知郡愛荘町)
 - ・農業生産法人(株) 茗荷村同労社(滋賀県東近江市市ヶ原町)
 - ・農業生産法人(株) 茗荷村同労社大津市店(滋賀県大津市日吉台)
 - ・グループホーム 和楽(滋賀県大津市和邇今宿)
- 大萩茗荷村が、十人少して田村一二氏とともに開村して四十年。NPO法人や社会福祉法人が次々に設立され、非営利の活動が続いてきた。このように続いてきた理由は何か。もちろん田村氏の崇高な理念と、熱い信念、そして実行力と努力があったから、ということとは間違いない。そして、その思いを受け継ぎ、次の世代につないだ人物や、彼らを支えた人

たちがいたからであると感じた。

次章では、その田村一二氏の思想とそれを受け継ぎ発展させてきた事柄について述べてみたい。

第二章 田村一二氏の思想

(一) 周梨槃特と茗荷村の原点

田村一二氏の考え方を検証する際に、まずこの村の名称である「茗荷」について記しておきたい。この「茗荷村」という名称の由来は、筆者が二〇二一年に大津茗荷村を主宰する藪田喜山氏に出会い、茗荷村に興味を持ったきっかけとなった。

茗荷村の「茗荷」とは、お釈迦様の仏弟子である周梨槃特の説話に由来する。

バラモン教の信者であった周梨槃特は、生まれつき記憶力が非常に弱く、物事を覚えることが苦手であった。一方で兄の摩訶槃陀伽^{マカハダカ}は優秀で、学問に秀でていたため、バラモン教から仏教の教えに興味を抱き、舍利弗^{シャリフ}や目連^{モクレン}とともに仏弟子となった。

その兄、摩訶槃陀伽の勧めによって周梨槃特も仏弟子となる。しかし、周梨槃特は大切な釈迦の教えが頭に残らない。ついに兄にも努力が足りない叱られ、努力しようにも成果が出ず、途方にくれて祇園精舎を後にする。

ある時、悲しみに暮れる周梨槃特にお釈迦様が声をかけた。周梨槃特が事情を話すと「悲し

む必要はない。周梨槃特は自分のできないことを知っている。世の中には自分ができると思っているが、全くできていない者がたくさんいる。できないことを仮に愚かであるとする愚かさを知ることが最も悟りに近づくことである」とお釈迦様は優しく促した。

そして、一本の箒^{ほうき}を持ってきて、「ちりをはらわん」「あかをおとさん」という言葉を授けられた。

周梨槃特は、それからその言葉を覚えるために、毎日箒でちりを払うという掃除三昧の日々を送った。二十年間掃除を続け、その中で、一度お釈迦様に言われたことがあった。「何年掃除をしても上達しないが、上達しないことに腐らず、同じことを続ける。上達することも大切だが、根気よく同じことを続けることは、もっと大事なことである。これは他の仏弟子にみることでできない大切なことである」。

周梨槃特はこのような言葉に支えられて掃除を続けていたが、ある時、「ちりやほこりは、いつもあるだろうというところにあるだけではなく、こんなところにもあるのかというところにあつたりする。すなわち、自分が気づかないところにも、大事な物事が隠れている。自分は愚かだと自覚していても、もっともつと愚かな部分があるのかもしれない」ということに気付き、阿羅漢（尊敬に値する修行者）の悟りに達した。

仏弟子周梨槃特の説話の概要は上記の内容となるが、その後の俗説として、周梨槃特が亡くなり、彼のお墓に茗荷が生えたという話が一般に知られるようになった。茗荷村の「茗荷」は、周梨槃特の行いとその存在を意味し、村のシンボルとなっているのである。

これまで、近江の各地を歩きながら、各地に残る仏教説話に由来する伝承、伝説を取りあげてきた筆者にとっては、非常に興味深い話であった。思い返せば、筆者が幼い頃、母親から「茗荷を食べるとアホになる。昔、勉強ができひんアホな人が死んで、そのお墓に茗荷が生えたんやって」という話を聞いたことを思い出した。この話が、仏弟子周梨槃特の深い仏教説話に由来するということに感嘆した。また、調べてみると赤塚不二夫の名作漫画「天才バカボン」の「レレレのおじさん」のモデルが周梨槃特であるという俗説も目にして驚いた。

田村一二氏は、障害児童を周梨槃特になぞらえながら、賢者も愚者も隔たりなく活動できる祇園精舎のような場をつくろうとされたのであろう。そのことを「茗荷」という言葉が表している。

「茗荷」という言葉から、様々な関心ごとにつながり、茗荷村を創設した田村一二氏の思想や、村自体の取り組みに興味を持ち始めた。

(二) 田村一二氏の思想

昭和六十三年（一九八八）に発刊された「茗荷村通信二十八号」に、田村氏の「茗荷村とは」と題さ

れた文章が掲載されている。田村氏の茗荷村に対する思い（精神）が簡潔に書かれていると思います、そのまま下記に取りあげてみた。

「茗荷村とは」

福祉ということとは、語源から解釈してゆくと、つながりの水平化ということになる。施設も福祉の一つの型であるが、それが、垣で囲まれ、鉄の門で、完全に社会から隔てられているならば、語源からいって、本当の福祉のかたちとはいえないように思う。まして、その施設の中が、棟毎に錠前で遮断されているとなると、つながりの水平化という福祉の性質からみて、とんでもない福祉施設だといわねばなるまい。更に、そのような隔離的施設の数だけを見て、わが県は、福祉県であると鼻を高くしているのは困ったものである。

そこで「村づくり」に踏み切ったのである。ここは門も垣もない。賢愚、老若、男女、いろいろ差があるが、みんな仲よくやってゆく。これが差があつて別なしである。そして、流汗同労の生活の中で、愚者を見る目が正當になった人が、社会に帰ってゆく。このあたたかい目が、障がいのある人たちをどれほどあたたかく励ましてゆくか、これを経験的に言い切れるのである。

茗荷村はこの目をつくり上げてゆくところである。そのためには「賢愚和楽」の場であり、

その方法は「流汗同労」でなければならぬ。そして、このあたたかい目が、地球を洗う石けんになることを心から祈っている。

したがって、障がい児者をもった親御さんが、その人たちを茗荷村へ預けようとされるが、村の本質目標からするとただの分離隔離の場ではないということを理解していただきたい。

『茗荷村通信二十八号』昭和六十三年（一九八八）

田村一二

茗荷村には、四つの村是（村の目標、指針）「賢愚和楽」「自然随順」「物心自立」「後継養成」がある。これらも含め、田村一二氏が茗荷村創設以来、大切にされてきた精神である。

福祉という言葉は水平を意味し、障害者と健常者を分けるのではなく、ともに汗を流して作業に取り組む中で、「あたたかい目」が育まれ、村が一つになっていく。この真理を理解し、広げ、後世に伝えつなぐことが理想とされたのである。

（三）宗教にみる茗荷村の理念 つないできた人々

この田村氏の考え方に共感し、開村当初から入村した初代大萩茗荷村代表の高城一哉氏の存在が、この茗荷村の今にとって大きく影響したと考えられる。

高城氏は大津市膳所の出身で、社会福祉というよりは、資本主義社会の末路にある悲惨な戦争に心を痛め、これからの社会のあり方を考えてきたという。

新しい社会とは何か。そこに共同体をつくるという考え方が生まれてきた。小説家で文化人の武者小路実篤と彼らが所属する白樺派の活動家たちが構想した「新しき村」の実践などが刺激になった。また、そのような村、理想郷をつくるためには、例えば、仏教という慈悲、キリスト教という愛、儒教という仁など、人としてどうあるべきかということも大切である。一人ひとりがそれら大切なことを理解しなければ、理想郷にはたどり着かない。高城氏は、仏道に入って千日回峰行を満行した箱崎文応大阿闍梨に師事し、考え方を固めていった。

そして、戦争孤児の救済に関わって「この子らを世の光に」という「近江学園」で糸賀一雄氏や池田太郎氏、そして田村一二氏に出会い、孤児の面倒を見ながら、やがて茗荷村に入村するということになったという。

令和四年（二〇二二）に大萩茗荷村が誕生して四十周年迎えるということで、八月、盛大に記念式典が開催され、十二月に『大萩茗荷村四〇周年を迎えて』という記念冊子が発刊された。その記念冊子の中に記念座談会という企画があり、「後継養成を考える」という、村是の一つである「後継養成」について、高城氏をはじめ、現在の茗荷村を支えるキーパーソンが語るという貴重な記事が掲載されていた。

この記事の内容が、すなわち筆者がはじめに感じていた、なぜ茗荷村が開村からここまで発展してきたかという理由が理解できるのではないかと思ひ、

以下に内容を紹介したい。

(四) 大萩茗荷村四十周年記念座談会から

大萩茗荷村の四十周年記念冊子に「茗荷村の心で生きること」後継養成を考えると題された座談会(二〇二二年四月十日 石南花の家にて開催)に参加された人々は、

・小泉一郎氏

現在大萩茗荷村代表 座談会の司会

・高城一哉氏

初代大萩茗荷村代表

・山形宗湛氏

比叡山延暦寺理性院住職 高城氏のご子息

・小泉麥哉氏

NPO法人三艸苑家族 天空・宗教法人茗荷山

天保寺奉仕会代表 小泉氏のご子息

・東浦弘昌氏

農業生産法人(株) 茗荷村同労社代表取締役

・前田洋和氏

NPO法人三艸苑家族 天空・NPO法人茗荷

村 大萩茗荷村通信担当

・高橋翔氏

NPO法人三艸苑家族 天空・ファミリーホーム

石南花の家 元里子

の合計七名である。

茗荷村がこれまでに発展、継続してきた要因が、この座談会で語られる言葉に含まれるであろうと考え、彼らの語録を拾いあげてみた。

○小泉一郎氏

現在大萩茗荷村代表 座談会の司会

・茗荷村に尽くされた人々のために我々がある。田村先生の理念である「二つ一つ」や四つの村是が、机上の空論ではなく実践を通して続けられてきた。それらを受け継いだ人々の思いが「後継養成(村是の一つ)」につながっている。

・高橋翔くんは、里子として村に来てくれた。不登校したり、コンピューターの勉強したり、司書の勉強したり、岡山に行ったりして、迷いながら結局、村がいいと思って戻ってきてくれた。

・支えたと支えられるは、常に行ったり来たりで、許すと許されるも一つ。田村先生がおっしゃる「二つ一つ」。その両極を愛でつないで、学んでいるのが茗荷村。人間はそんなに立派ではないので、行ったり来たり、出たり入ったりしながら、それぞれに一生懸命やったら良いと思う。

・天保寺の経典「日々の祈り」の中には、まづ村是があります。「親元根元、子は梢」というものも、まづご先祖や先輩を大切にしようという天理教の教えだと思う。禅宗という器とお茶の関係と同じことで、みな「二つ一つ」に行き着く。村に天保寺ができたことは、これから大きな意味を持つてくと思う。

○高城一哉氏

初代大萩茗荷村代表

・どんな宗教でも最初に習うのは下駄を揃えて庭を掃いて、納屋を掃除すること。茗荷村では周梨槃特さんの行いを模範としている。親がやらずに子供に言っても「お父ちゃん、お母ちゃんがやらないのになぜするの」ということになる。田村先生や糸賀一雄先生も「お掃除」ということから、「親が行わないことを子供はしない」と話されていた。田村先生は奥様と二人で、子供たちの模範となる行動をとられていた。その姿こそが茗荷村の一番の学びである。

・田村先生が創られた石山学園は戦前からあったが、平和のための「愛の生き方」を実践するためには、一番弱い人を一番大切にする村づくりが理想にあった。

・本来の福祉は愛の実践であって、「今、自分はいいことをしている」という「福祉高慢」ではだめ。従来、茗荷村の人たちは必要以上のものは、みんな社会の困った人たちのためにお供えをさせてもらっている。これらは一燈園の方々に教わった。一燈園の石川洋先生は、カンボジアのポル・ポト政権に虐殺された人たちの孤児を中心に「スーベルファーム」という農園を作って、孤児たちが自立することに協力されていた。

・田村先生が考えた村是の一つ「賢愚和楽」は「差はあっても別はない」という。そういう世界は自然の中にある。これも村是の一つ「自然随順」につながる。今の社会は自然そのものを利害損得の対象として自然からたくさんのものを奪い取っている。私たちは命そのものが輝いている姿として、この自然を見ることを忘れている。

・「後継養成」を考えることは、他の命のために自分を捧げて、尽くして行けるかと考えることである。愛のまなざしを生きとし生けるもの全てに注ぐ「目玉石けんの愛」に、我々は生きられるかという大事なところに、今、茗荷村は来ていると思っている。

・「楽々の中に実はない」という田村先生の言葉がある。お釈迦さんがおっしゃった悉皆苦の中で、自分たちの魂を磨いて、そういう自立をしてほしい。それが田村先生ご夫妻が歩まれた道の花布教所の歩みだと思いうし、自分を捧げて他のために尽くすという生き方を踏襲するのが我々弟子の立場だと思う。四十周年の後は、どうかそれでお願したい。

○前田洋和氏

NPO法人三艸苑家族 天空・NPO法人茗荷村 大萩茗荷村通信担当

・自分にとって茗荷村は「勉強」を超えたも

のであった。前田家で一緒に暮らしていたYさんは、耳が聞こえず、知的障害も持っていた。Yさんは私の父に「コーヒー一杯頂戴」とジェスチャーをしてねだり、父がコーヒーを渡すと、「おいしい、おいしい」と本当に喜んで飲む。家のことを頼まれたら、一生懸命お手伝いをする。自分はYさんの姿と自分を比べて、長い間、引き裂かれるような思いをしていた。

・自分が不登校になった時、茗荷村では「こうあるべき」と指導や説教は全くなかった。茗荷村に暮らして、「至らない自分」「仕方ない自分」を一生懸命させてもらっている方に出会って勉強してきた。

・「石南花の家」では、家族で毎日、朝晩に般若心経を唱えているが、「すずらんの家」でもやっている。ある時、父（雅敏）が、高城さんから「子供たちが村是を知らないとはどういう子育てをしているんだ」と叱られた。その日から、お勤めの後に四つの村是をいうようになった。

○山形宗湛氏

比叡山延暦寺理性院住職 高城氏のご子息

・茗荷村で生まれて育った。生活そのものが茗荷村だったので、障がいがある人もない人も、いろんな人が日常の中でみんな一緒にいるのが当たり前だった。茗荷村では、

いろいろな人とご縁を結んで、家族になったりして、つながっていく。今、茗荷村を見ると、高城家も小泉家も人がいっぱい。高城の家族がいつの間にか増えているから、一体どこまでが高城家なのかと思っていた。ご縁でつながり、生活の中でつながる。茗荷村の「家族」という感覚は、言葉で説明してもわかるものではないと思う。

・茗荷村は弱い人を大事にする。社会的に弱者と思われる人は、本当は私たちの先生だと考える逆転の発想が茗荷村である。例えば茗荷村では鶏を飼って世話をしているが、実は人が鶏に世話をされていることもあるかもしれない。農作物に人が育てられたり、学校でも生徒に先生が学ばされているということも同じ。

・これは仏教観でもある。自分がやっているように見えて、実はやってもらっている、させてもらっている。そこに気づいたら、ものすごく物事がやりやすくなり、それぞれの良さが感じられる。

・茗荷村の歴史の中で、四十年を経て、天保寺ができたことは非常に大きいことである。天保寺ができたことで、ここでみんなが生きていけるという大きな道筋が見えてきた。初代住職の前田さんは、第二世周梨槃特さんだと思う。道の花布教所を田村先生から引き継がれたということは、先輩を

大事にして、その心を引き継がれたことは重要なこと。

○小泉麥哉氏

NPO法人三艸苑家族 天空・宗教法人茗荷山天保寺奉仕会代表 小泉氏のご子息

・山形宗湛さんと同じく、自身も、生まれた時から生活そのものが茗荷村だった。「石南花の家」が茗荷村だという感覚がある。両親が自分の生き方としてやっていることなので、大変そうに見える時もあったが、それを生活の軸としている姿を見ると幸せそうだとも思っていた。「こういうことだからしなければいけない」と言われたわけではなく、それが当たり前だと思つて育つた。一旦、普通の一般的な介護施設に勤めたが、何か違和感を感じ、施設のやり方にも自身の考えがあわず、茗荷村に戻ってきた。現在は「天空」で活動をしている。

誰かのためにさせてもらうことは、こんなに幸せで良いのかという感覚がある。当たり前前に奥さんがいて、子供がいて、食べるものがあって、屋根があって、それを大事なことだと思える自分がある。小さい時から見てきた親や村の人たちの背中が、それが大事なことで、幸せなことだと教えてくれていたのだと思う。

・自分自身が「村」になりたい。自分が一生

懸命やる、大事なことだと思つてやる、楽しそうに村のことをやるのが一番大事で、自分もそういう村の人たちを見て、すごいなと思う。いろんな人たちの姿を見て、自分もそうになりたいと思う。「自分がしながら、相手からされている」という経験を毎日させてもらっている。

○東浦弘昌氏

農業生産法人(株)茗荷村同労社代表取締役 大学で農業を学んだ。自身は、もともと人付き合いもそんなにできないし、社会に合わせることも得意ではない。障がいのある人もない人も一緒に活動している茗荷村という存在を知つてこの村に来了。農業をすることが目的ではなく、社会的弱者と言われる人たちと一緒に田んぼや畑をしたいという思いで来た。

・村では、農業生産法人「同労社」で畑をさせてもらっている。現代の農業の姿ではなく、昔の「農」の考えを大切にしたい。それがすごく可能性のあることだと思いがながら、実際にできているかわからないけど、やつてきた。

第三章 茗荷村のこれから

〈近江学の視点で見る〉

(一)「石南花の家」と小泉氏の家族

二〇二三年の暮れに、小泉一郎氏のご自宅でもある、滋賀県蒲生郡日野町の「石南花の家」を訪ねた。「石南花の家」は、元々、日野商人につながる家系の商家の民家を譲り受けたという古民家で、部屋が大小合わせて二十五室あるという。そこに〇歳から八十歳くらいまでの幅広い年齢層の、障害を持つ人、持たない人(身寄りのない人、里子さん)、小泉氏の家族、合わせて二十五人が暮らしている。

小泉氏は大萩茗荷村に来て三十六年、日野に暮らして二十五年になるという。バブル絶頂期に東京農業大学で農業を学び、父親はこれからは経済の時代と言っていたが、それになぜか反発し、大学卒業後もタイの農村に入つて古き良き時代の農業を体感した。そこで茗荷村に関係する人物と出会い、日本に帰つて大萩茗荷村に初めてやつてきた。

茗荷村で、高城さんと出会い刺激を受け、また現在の妻ともそこで出会った。三人息子がいるが、全茗荷村で育て、今も一緒に暮らしているという。

(二) 近江学研究所が目指していること

現在、筆者は近江学研究所で、文化誌「近江学」を編集しながら、これからの社会のあり方について常に考えている。近江学研究所では、当初、「近江のかたちを明日につなぐ」というところから、これ

からのものづくりを行うために、過去のかたちや、仕組みを検証することに重点を置いてきた。そして、近年になり、近世の暮らしから未来社会のあり方を考えるようになってきた。すなわち、近江に残されている地形、自然環境、そして祭礼やそこに現れるものに着目することで、これからの社会に生かすことができるものは何かと。

近江学研究所が発刊する文化誌「近江学」は、二〇一九年に「里」、二〇二〇年が「川」、コロナ禍で一年休刊の後、二〇二一年に「祭」というテーマで、近世の暮らしについて眺めてきた。そして二〇二二年はコロナ禍を経験して近江における「禍」をテーマにした。そこから見えてきたものが「コミュニティ」であった。近世の暮らしは、集落を単位とするまさに血縁と地縁のコミュニティが基本になる。そして、その集落を襲う自然災害（地震、火災、洪水、旱魃、害虫の発生など）に晒され、現代人も経験したコロナ禍のような、疫病（天然痘、コレラ、マラリア、スペイン風邪など）にも襲われてきた。これらに立ち向かうため、人々は、地域コミュニティの結束を深め、お互いが支え合って乗り越えてきたことが見えてきた。

近江学研究所では、二〇二三年に「惣（地縁、血縁のコミュニティ）」、そして「座（生業のコミュニティ）」、「講（楽しみのコミュニティ）」という内容で、この三年間、身近にある様々なコミュニティについて研究を深める計画を立てている。

（三）近世集落の姿

近世の集落を眺めると、基本的に、その場所で生まれ、そして育ち、家族を持って一生を終える。暮らしは、その場所にあるもので家を建て、畑や田圃を造成して作物を植え、消費する。地産地消は当たり前で、ほとんど無駄がなく使用した道具やものは大切に扱い、最後は自然に帰っていく。すべてが地域（集落）内で循環する。

日常の農作業や、道路の補修、家の修繕、災害時の備えなど全てのことは村人が協力して集団で行う。ここに深く結びついたコミュニティが形成されるのである。また、日常の楽しみもみんなで共有する。神様や仏様など信仰をもとにした「〇〇講」と呼ばれる組織が形成され、そこでは様々な楽しみが展開される。年に一度の村の祭りは全村人が参加する最大の行事である。

（四）近現代社会の弊害

一方で、現代の暮らしに目を向けると、インフラストラクチャー（交通、電気、水道、ガス、ゴミ処理など）の整備が行き届き、合理化されて生活するにあたって非常に便利になった。言い換えると隣人に頼らずとも生活ができる仕組みが整った。娯楽についても、いつでも誰でも手軽に個人で楽しむものが、家の中にもあり、町にも溢れている状況がある。

これらを近世と比べてみると、全く逆の暮らしのかたちであると言える。もちろん近代社会は、大量

にモノをつくって消費することで、経済を大きく発展させてきたのであるから、当然の結果として現代の社会がある。近代社会は意識的に近世の共同体を解体し、便利で豊かな暮らしを実現した。しかし一方で、環境汚染や紛争の勃発、地域コミュニティの希薄化とそれに伴う個人の孤立など、様々な弊害が明るみになってきた。

幸せな未来社会をつくるためには、もう一度、近世社会に目を向け、そこから何かを見つけて行かねばならない。近江学研究所の研究は、近江の貴重な風土を検証し、未来社会へつなぐことを目的としている。

（五）現在の茗荷村の姿に思う

その視点で、茗荷村を訪ねた時、筆者は現代において、近世社会の至宝を垣間見た思いがした。以下にその項目をあげてみたい。

- ・ 田村氏の思いがあつたというが、過酷な自然状況の中に村をつくることで、共同体の結束が生まれ、みんなが助け合い、そこに深い絆が生まれること。
- ・ 山形宗湛氏や、小泉麥哉氏など茗荷村で生まれ育った人たちは、障害がある人、無い人が普通の家族として扱われ、みんなが平等で、認め合い、村是にしたがつて暮らすことが当たり前であると感じている。そして、大家族が普通の暮らしであること。

・ 弱い人を大事にすること。社会的に弱者とかわれている人は、本当は私たちの先生だと考える逆転

の発想が茗荷村にあること。

・地域に存在する農作物や生物を大切に扱い、その恵みを享受していること。

・四つの大切な村是を中心に神仏を超えた教えを持った宗教法人「天保寺」が村の精神の支えとなっていること。

・年間を通して、様々な行事（新年会、進級進学祝い会、田植え、座禅会、潮干狩り、寺子屋キャンプ、地蔵盆と盆踊り、彼岸会、稲刈り、焼き芋、お楽しみ会など）が設定され、村人が協力して行事を行い参加していること。

現在、「環境、経済、社会」の均衡を取りながら、国際社会が十七の目標を掲げているSDGs (Sustainable Development Goals) が広く知られているが、茗荷村の取り組みの中に、十七の全ての目標が網羅されているように思う。

高城氏が話しておられたが、「田村先生が開村時は茗荷村の活動は、外の人から中々理解してもらえないが、いつの日にか、茗荷村のあり方が普通になる日が必ずくる。来ないといけない」。

確かにその通りなのかもしれないと筆者も改めて感じた。

おわりに

茗荷村には、茗荷村で生まれた人、茗荷村に興味があつて遠くからきた人、身寄りがなく里子として

やってきた人などいろんな人が暮らしている。いわゆる地縁、血縁の濃いコミュニティが形成されていた。

二〇二四年の元日に、石川県能登半島を烈震が襲った。復旧の目処が立たず、辛い思いをしている方々がまだ多くおられると聞く。このような大災害は、日本においてはいつどこで起こってもおかしくない。その際に最も大切なのが、地域コミュニティであると言われている。災害時の救助活動から復旧活動、災害後の心のケアなど含め、地域コミュニティが果たす役割は大きいとされている。

茗荷村のような、しっかりとしたコミュニティの存在が求められているということも改めて感じた次第である。

今後も、四十周年を迎えた茗荷村の活動には注目していきたいと考えている。

今回の取材でお世話になりました大津茗荷村の薮田喜山様、大萩茗荷村代表の小泉一郎様、高城一哉様にこの紙面をお借りして御礼申しあげます。

参考文献・資料

・『大萩茗荷村四〇周年を迎えて』大萩茗荷村編・発行 二〇二二年

・田村二二『茗荷村見聞記』北大路書房 一九七一年

・田村二二『賢者モ来タリテ遊ベシ 福祉の里 茗荷村への道』NHKブックス 一九八四年

・文化誌『近江学 里—のいとなみ』第十一号 成安造形大学

附属近江学研究所編 サンライズ出版 二〇一九年

・文化誌『近江学 川—とはぐくむ』第十二号 成安造形大学附属近江学研究所編 サンライズ出版 二〇二〇年

・文化誌『近江学 祭—よりどころ』第十三号 成安造形大学附属近江学研究所編 サンライズ出版 二〇二二年

・文化誌『近江学 禍—転じて』第十四号 成安造形大学附属近江学研究所編 サンライズ出版 二〇二三年

・文化誌『近江学 惣—はじまりのコミュニティ』第十五号 成安造形大学附属近江学研究所編 サンライズ出版 二〇二四年

映像資料

・DVD『茗荷村見聞記』原作…田村二二 監督…山田典吾 製作…現代ぶろくしょん